

後期ヴィトゲンシュタイン

『哲学探究』という書物
一冊のアルバム

『論理哲学論考』と並ぶ、ヴィトゲンシュタインのもう一つの主著『哲学探究 (Philosophische Untersuchungen)』(略称『探究』)の序文は、こう始まる:「以下で私は、この十六年間私が没頭した哲学探究の沈殿物である諸考察を公刊する。」序文の日付は一九四五年なので、「この一六年」とは、一九二九年から数えた一六年だ。そして一九二九年というのは、『論考』を書き終え哲学から遠ざかったヴィトゲンシュタインが、小学校教師や建築家として生きた後、ケンブリッジへ戻って再び哲学をすることになった分け目の年である。彼は四〇歳になろうとしていた。この年以降の哲学的考察のいわば総決算が『探究』だ、ということになる。

ただこれは、ヴィトゲンシュタインの後期哲学が一九二九年に始まった、ということではない。哲学復帰当初、彼はまだ『論考』の思想圏にいた。そのため、古い発想と新しい発想とが渦巻く過渡期が、二九年以降しばらく続く。後期という目的的分の始まりは一九二九年よりもっと遅く、(後でも触れるよう)一九三〇年代半ば頃となる。

『哲学探究』は、その著者が自ら出版した本ではない。それはヴィトゲンシュタインの死から二年後、一九五三年に、著作権を託された遺稿管理人たちの手によって世に出された。現在ヴィトゲンシュタインの著作として出版されている書物は二〇冊ほどもあるが、彼が生前に出版した哲学書は『論考』一冊だけだ。死後出版されたものには口述筆記本や講義録もあるが、ほとんどは、遺稿管理人たちが膨大な量の遺稿を何らかの形でまとめ、ヴィトゲンシュタインの著作として出版したものだ。そのような出版形態の場合、その本は果たして著者が出版を目指していたものか、著者が完成品と見なしたものか、編集結果は著者が承認するだろうものになっているか、などの疑問を自ずと招く。『探究』第一部はこういった疑問を一通りクリアしており、死後出版された作品の中では最も純粋な意味で、ヴィトゲンシュタイン本人の著作と言える。

「『探究』第一部」と書いたが、『探究』は二部構成になっており、第一部が全体の四分の三ほどを占める。当面第一部を中心に話をするが、『論考』とは違った意味で、『探究』は風変わりな本だ。それは、章立てに沿って論述が順序よく展開する通常形式の本でなく、「覚書」の集積になっている。「覚書」というのは、ドイツ語で「Bemerkung」と表される　そして「remark」と英訳される　ひと塊の思考のことである。覚書には、簡潔で魅惑的なスローガンもあれば、議論を含む比較的長いものもある。それらは『論考』のような凝縮された神託風スタイルでなく、平易な言葉で、しばしばミニ対話式で書かれている。第一部は、一から六九三までの節番号が割り振られた覚書　および欄外に印刷されている一七個の覚書　で構成されている。『論考』の節番号には節同士の入り構造を表す工夫が凝らされていたが、『探究』の節番号は単なる通し番号だ。目次も見出しもなしに続く七〇〇もの覚書から、全体構造はなかなか読み取れない。

ヴィトゲンシュタインはそのような『探究』について、それは長きに及んだ哲学の旅の「アルバムに過ぎない」と序文で語っている。『探究』を読もうとする人は皆、この言葉が偽らざるものだと思い知る。序文では、アルバムとは画家のスケッチアルバムになっているが、今は代わりにスナップアルバムを思い浮かべよう。『探究』の言葉は平易なのに、それは独特の仕方で理解が難しい。その難しさは、訪問先も多岐に亘る長い旅行のスナップアルバムを見せられ（写真は年代ごとに並べられていなかったりする）、そこに何らかのテーマの展開を見て取らねばならない難しさに喩えられる。一枚一枚の写真は印象的かもしれない。しかしそれぞれの写真がどういう意図で撮られたのか、また複数の写真同士がどう関連しているのか、解説なしには容易に汲み取れない。

成立過程（第一部）

『探究』はなぜ、アルバムの形をとったのだろう。それは直接的には、ヴィトゲンシュタインの原稿作成プロセスのせいである。このプロセスを一瞥しておくことは、対象を知るという意味で、読解に役立つだろう。

まず全般的事柄だが、ヴィトゲンシュタインの原稿には手書原稿とタイプ原稿があり、それらは原則、母語のドイツ語で書かれている。原稿作成時には、ヴィトゲンシュタインは一まとまりの考えを「覚書」として、次々にノートや紙片に書き留めた。覚書が溜まると、よいものを精選・推敲して、より練られた原稿を作った。それらが溜まると、ある段階でタイピストを雇って、それらを基にここでも改訂を加えつつタイプ原稿を作った。タイプ原稿は、さらに推敲され、鋏で切り分けられ、配列を変えられ、別のタイプ原稿の基になる。この改定作業は果てしなく続けられ、ヴィトゲンシュタインの死後多くは彼が処分したにもかかわらず大量の原稿が残された。（それゆえヴィトゲンシュタイン研究のジャーナルとして、「遺稿研究」という分野がある。遺稿管理人の一人であるフォン・ウリクトが、ヴィトゲンシュタイン哲学の文献研究に欠かせない遺稿目録を作っており、手書原稿（MS）には一〇〇番台の、タイプ原稿（TS）には二〇〇番台の番号が付けられている。また二〇〇〇年には、すべてのMSおよびTSがテキストデータ、画像データとして参照できるデータベースが、オックスフォード大学出版局から発刊された。）

初期版まで

『探究』は一九二九年以降の思索の結晶だが、結晶が具体的に姿を見せ始めたのは一九三六年になってからだ。『探究』が後期の代表作品だという意味で、後期思想の開始期は遅くとも、『探究』が現在の形を取り始めたこの時期に見出せる¹。一九三六年はヴィトゲンシュタインにとって、一つの転機だった。というのもケンブリッジに戻って以来ヴィトゲンシュタインは、最初は奨学金を受けながら、次は有給の研究者として、哲学に没頭し成果をまとめようと精力的に努力していた。その研究員の任期が、一九三六年中頃に終了したのである。

¹ 次にその「先行研究」である『茶色本』、そしてさらに遡って『青色本』との関係も考えるべきだろう。

身分と収入を失った（そして前年にはソ連移住を断念した）彼は、以前利用したことがあるノルウェーの山小屋へ行くことを決めた。そしてしばらくの間、専らそこが、著述の拠点となった。このとき以降、現在ある『探究』が、徐々にその姿を現していく。

ノルウェーでは、夏からの或る企て（『哲学探究 改良の試み』と題し、『茶色本』を独訳する企て）を断念した後、一月から新たな試みが開始された。このとき孤独の中で書かれたのは、現在の『探究』の第一節から一八八節に対応する原稿だ。翌三七年にも、ノルウェーで『探究』の続きが書かれた（このときの原稿は数学の哲学に関する内容で、後に『探究』から外され、『数学の基礎』第一部の基となった）。次にノルウェー滞在初年の手書原稿からタイプ原稿二二〇が、滞在二年目の手書原稿からはタイプ原稿二二一が作られた。これら二原稿の合本に序文が付いて一九三八年にできたのが、初期版『探究』である。この年いったんケンブリッジ大学出版局と出版合意をしたが、合意はすぐに取り下げられた。死後まで出版されなかった本に、ヴィトゲンシュタインがこの段階で満足できるはずがなかった。

中間版まで

一九三八年、初期版『探究』が完成する数ヶ月前、ナチスドイツによるオーストリア併合があった。これによりヴィトゲンシュタインはドイツ国籍のユダヤ人となり、非常に不安定な立場に置かれることになった。職業的身分を持たず、本を完成することだけに力を注いでいた彼だったが、状況柄、イギリス国籍を取得すべきだった。彼がケンブリッジに職を探したのは、こういう事情による。一九三九年、彼はG・E・ムアの後任として教授職に就き、英国籍も取得する。これによって彼は、ナチス政権下のウィーンやベルリンを訪れ、故国に残された家族を守るための対ナチス交渉に関わることもできた。だが必要に迫られて得た身分に、彼は安住できなかった。教授になった年の九月、第二次世界大戦が勃発。戦時に大学で暮らすことなど心中になかったヴィトゲンシュタインは、私的講義を行い原稿を書き溜めながらも、一九四一年から四四年まで、爆撃を受けるロンドンの病院などでポーターや実験助手の仕事をしたのだった。

さて一九三七年に書かれた初期版『探究』の後半部は数学に関する内容だったが、以後四四年の初めまで、ヴィトゲンシュタインの主な関心は数学の哲学にあった（考察の結果は編集され、『数学の基礎』となっている）。しかし一九四四年に病院の仕事に区切りをつけ教授職に戻るまでに、ヴィトゲンシュタインの関心は数学から心理学に移行した。そしてこの短期間の変化は、中間版『探究』に反映されている。中間版『探究』は現存しないが、一九四五年一月頃に、そのタイプ原稿が完成していたとされる。フォン・ウリクトによる文献学的再構成によれば、中間版は、初期版『探究』の前半部分を改訂し、後半の数学の哲学の部分をほとんど省き、新たに規則順守および私的言語に関する一定量の考察を加えたもので、内容的には最終版『探究』の四二一節までに登場する覚書を含む原稿だ。最終版『探究』の序文には「一九四五年一月」の日付があるが、この序文は元々中間版に対して用意されたものである。

最終版まで

一九四五年以降、ヴィトゲンシュタインは数ヶ月をかけ、彼が『覚書 (Bemerkungen I)』と呼んだタイプ原稿 (TS二二八) を準備した。これは様々な時期の手書・タイプ原稿から、有用と思われる覚書を拾い出したものだ。九月には教え子のマルコムに、「本は徐々に完成に近づいている」と手紙を送っている。ヴィトゲンシュタインは次に『覚書』から約四〇〇個の覚書を選び出し、その節番号のリストを作った。リストには、選択された覚書が中間版『探究』のどこに挿入されるか、また中間版の続きに、追加の覚書がどの順序で付け足されるか、の指示がある。現行の『探究』には六九三節までであるが、その半分以上がこの作業で加えられたことになる。最終版『探究』第一部となるタイプ原稿二二七は、一九四五年ないし四六年に作成された。この原稿には、四九年、五〇年になっても、ヴィトゲンシュタインは手書修正を加えている。それらの修正を含めてようやく日の目を見たのが、我々が現在知るところの『探究』第一部だ。

以上、『探究』の性格を説明するため、作成プロセスの長い道のりを簡単に追った。その過程は、覚書の準備、精選、推敲、シャッフルの連続であり、ヴィトゲンシュタインはこれを、絶え間なく繰り返した。これが『探究』を、様々な時期に起源を持つ諸考察 (古いものは一九三〇年にまで遡る) のアルバムにしている所以である。ヴィトゲンシュタイン本人が『探究』序文で認めるように、これが良くも悪くも彼のスタイルだ、ということは受け入れるほかない。だがその上で、アルバムスタイルは彼の探究の本質と関係があるかもしれないという可能性も忘れてはなるまい。いずれにせよこのような必ずしも読み易くない本なので、ヴィトゲンシュタイン研究では解釈が占めるウェイトが大きい。そして解釈は、研究者同士で大きく食い違うこともある。『探究』へ近づくには、様々なある注釈書・注釈論文の解釈を参照しつつも、自分の解釈を原典にぶつけ、ヴィトゲンシュタイン本人とのろのろ対話しながら読む、というのが結局は最短距離だろう。

以下では私の目に映る『探究』を、一番太い線で描写したい。まず『探究』第一部を中心に、また第一部のアイデアに通じると判断される場合は、他の著作にも言及しつつ説明しよう。

『哲学探究』第一部 アナロジーによる知性の幻惑 哲学のメソッド

『探究』の内容の解説に入っていくが、ヴィトゲンシュタインの哲学観を出発点としたい。前期・後期一貫して彼は、哲学の問題は言語の誤解から生じるものと考えた。『探究』が、哲学的問題を「言語による我々の知性の幻惑 (PI §109)²」と特徴付けていることは、よく知られている。しかし言語の何が、我々の知性を欺くのだろう。ヴィトゲンシュタインの答えは、「我々の言葉のかた

² 引用時の略号については、章末を参章。

ち (PI §111)」である。彼はこう言う：哲学的問題は「…言語の異なる領域での表現形式同士の何らかの類似 (Analogie (アナロジー)) によって引き起こされる (PI §90)。」例えば「我々の言語形式に組み込まれた比喩が、偽りの見せかけを生むのだ (PI §112)」、と³。

例に挙げられるのは、『探究』でも言及がある、アウグスチヌスの戸惑いである (PI §89)。アウグスチヌスの戸惑いとは、「過去は過ぎ去り、未来はまだ来ず、現在は点なのに、なぜ時間の長さは測れるのか」、「過去はどこに過ぎ去ったのか」といった疑問である (BIB p.26, cf. BrB p.108)。彼は答えに窮し、「時間とは何か。問われると、分からなくなる」と告白するのである。この戸惑いに対するヴィトゲンシュタイン的診断は、アウグスチヌスは「時間の長さを測る / テーブルの長さを測る」や「時間が過ぎ去る / 人が過ぎ去る」といった同形表現・比喩表現に惑わされて時間と物・人を混同するために苦境に陥った、というものとなる。

この種の困惑から抜け出るにはどうすればよいのか。ヴィトゲンシュタインは、概念同士の、見過ごされている「文法」(概念についての様々な決まりごと)の違いを明示すべきだ、と考える。アウグスチヌスのケースだと、「長さを測る」「過ぎ去る」という言葉の適用が時間と物とでどう違うかを、明らかにせねばならない。ここでの鍵は「違い」である。ヴィトゲンシュタインは、『探究』のモットーの候補として、「違いを教えよう (『リア王』)」や「すべてのものはそれ自身であり、他の何ものでもない (バトラー卿)」なども考えていた。混同された概念同士は、実はそれぞれ言語の違う場所に属するのであり、それぞれの文法は異なる。この違いが認識されれば、混同から生じた問題は自ずと消滅する。そしてこの種の問題の消滅・解消が、ヴィトゲンシュタインが目指したことだ。

前期・後期を通してヴィトゲンシュタインは、哲学的問題は言語の誤解から生じると考えた。両時期の大きな違いは、問題への対処法へ見出せよう。前期では、曖昧な日常言語が言語の論理構造を不明瞭にしているせいで誤解が生じるのであり、誤解を解消するには日常言語が隠している論理構造を明瞭に表す理想言語が必要だとされた (TLP 3.325, 4.002)。我々の日常言語は確かに、論理学の命題に比べ見通しの良さに欠ける。それゆえ後期ヴィトゲンシュタインは日常言語を空間的に喩えつつ、言う：「言語は様々な道から成る迷宮 (PI §203)」であり、「我々の言語は、[新旧様々な区画が入り混じった] 古い都市 (PI §18)」である、と。この喩えにおいては、知性の幻惑は、「私は迷子になってしまった (PI §123)」という形をとる。しかし『探究』は『論考』と異なり、迷子の人に理想の街の理想の地図を与えることが問題の解決になる、とは考えない。哲学者の役割は、人が迷子状態から抜け出せるよう、類似した区画を取り違えないよう、それぞれの区画にある文法標識に注意しつつ、現実の区画を案内することだ (LEM p.44)。哲学の目的は、理想によって問題を解消す

³ ヴィトゲンシュタインは、表現形式のアナロジー (類似) に、比喩という言葉使用を含めていると思われる。表現形式の類似として他に、同音異義語同士が持つ類似、同一品詞に属する語同士が持つ類似などがある。

ることだけでなく、見通しの悪い日常言語から離れずに、むしろその複雑な文法の見取り図的「展望 (übersichtliche Darstellung, Übersicht) (cf. PI §122)」を与えることで、問題を解消することだ、とヴィトゲンシュタインは考えるに至った。

デカルト主義的な人間の描像

後期ヴィトゲンシュタインが徹底的に解消しようとする幻惑は、アウグスチヌスを悩ませた時間に関する幻惑でなく、人間に関する或る描像である。これは「内と外の描像」あるいは「デカルト主義的描像」といった名で呼べるものだ。これによれば人間は、身体と心の二つの要素からできている。私の身体は誰もが外から等しく観察できるのに対し、私の心は外から観察不可能な領域、私だけが特権的にアクセスできる私的 (プライベート) な領域だ、とされる。例えば「私に痛みがあるかどうかを真に知れるのは私だけだ。他人はそれをただ推測できるのみだ (PI §246)。」もしかすると「まわりの人々は普通と同じように振舞っているが、実は自動機械で、意識を欠いている (PI §420)」ことさえありうる。こういったことを含意するならこれはもちろん、様々な哲学的問題をはらむ人間の像である。

ヴィトゲンシュタインの考えでは、このような人間の描像は、我々の心的概念に組込まれた表現形式のアナロジーないし比喩を昇華すること (cf. Ph §93) で または アナロジーを含むシンボリズムへの固執 (cf. BrB p.108) から 生まれる。では第一に、どんなアナロジーがあるのだろう。そして第二に、それらのアナロジーが昇華されると つまり特定の表現形式だけが、我々の意識の中で高みに引き上げられ、我々がそれに固執すると どうなるのだろう。

まず「人の体内」という表現と、心を意味する「人の内面」という表現には、「内」という同形表現がある (cf. RPP1 §824)。人間の「内面」というのはもちろん、人間の身体を切開して観察できる本来の空間的内部、解剖学的内部でない。だが表現形式のアナロジーに引き摺られ「内」という観念に固執することで、心という内部は、通常的内部とは異なる内部、当人の意識だけがアクセスできる特殊で私的な内部なのだ という描像が生まれる。次に「痛み」「喜び」といった語と、「テーブル」「椅子」といった語の間には、それらが名詞である点で、品詞上のアナロジーがある (cf. LPE p.206, LSD p.356)。名詞は典型的には物の名前前で、それが指示する対象がある。それゆえ類比によって、「痛み」「喜び」も同じで、それらの指示対象は私的な内的世界にある、という考えが生じる⁴。「私には痛みがある (I have pain)」といった文と「私には五〇〇円がある (I have 500 yen)」といった文の間にも、同形性、形の類似がある (cf. LPE p.263)。後者は事実の記述文だが、同形性から前者も同様の記述文だという考えが生じる。つまりその文で描写される私的な内面世界がある、という考えが強化される。心的概念にはこういったアナロジーが内蔵されて

⁴ 他にも「走る」「食べる」「書く」といった語と、「理解する」「意図する」「期待する」などの語の間にも、動詞という品詞上のアナロジーがある。このアナロジーも、私的世界における心的活動といった発想につながる。

おり、それらへの固執は各々、以上のようにしてデカルト主義的な人間の描像を生み出すのである⁵。

ヴィトゲンシュタインはこの描像に対抗するため、我々を次のような問いに導く：心について語るとき、我々は本当にプライベートな空間内のプライベートな現象について語っているのか。そんなことは「可能」なのか。これは、我々は自分だけが知れるもの　自分の直接的な私的感覚　を言葉で指示できるのか、という私的言語の可能性の問題にほかならない。『探究』二五八節の有名な「感覚日記の議論」で検討されるのが、この問題だ。感覚日記の議論では、他人に伝えようがない私的感覚が私の中で繰り返し生じる、という場面が想定されている。私はこれに名前　例えば「K」　だけでも与えたい。そこでこの感覚が生じたときに、意識内でこれを直示し、これを名前「K」と結び付ける。これが「K」の命名式　すなわち定義　である。以後、同じ感覚を感じた日には、定義に従って日記に「K」と記録する。　このようなことは、可能だろうか。

そのような定義を持ちださざるをえない限り「不可能だ」というのが、ヴィトゲンシュタインの答えである。というのもこの場合、定義に従って「K」を正しく使っているか、を判定する基準がないからだ。つまり他人はもちろん、当の私までもが、自分が「K」を正しく使っているか、それとも正しく使っていると単に思い込んでいるだけか、有意義に区別できないからだ。

この論点は、規則の本質に関する論点である。どんな語にも一定の使用規則があるが、規則を守っていると特定の話者が思っているだけでは、彼がその規則を守っていることにならない（PI §202）。規則には、順守の判定基準が必要である。そしてその基準は、規則を守っていると本人が思っているという主観的確信とは独立の、客観的基準でなければならない。例えば「足す二」の概念を教えられた生徒が、ゼロから始めて順に二を繰り返し足すとする。作業は順調に進むが、一〇〇を超えた途端、彼は「一〇二、一〇四、一〇六、…」でなく「二〇〇、四〇〇、六〇〇、…」と続ける。教師が間違いを指摘すると彼は、「ちゃんと同じように二を足しています」と自信たっぷりに答えるのである（cf. PI §185）。しかし「足す二」の規則に従っているという思い込みが、どれだけ強く本人にあると（かつ彼の反応に規則性があるとうと）、それだけでは「足す二」の規則に従っていることにはならない。というのも主観的確信が規則順守に十分なら、「本人が正しいと思うことが何でも正しい」ことになる。すると規則はもはやそれが持つべき規範性を失い、規則概念が崩壊するだろうからだ。規則が規則であるには、その順守の基準が本人の確信以外になければならない。

以上の考察がここで、感覚日記の議論とつながる。「K」という記号は、直示的定義という規則によって、私的対象と結び付けられているはずだった。しかしこの対象が私的であるかぎり、記録者が規則を守っているかを判定する客観的基準は存在しえない。順守の判定基準がない以上、「K」の規則は規範性

⁵ アナロジーへのこれらの固執は、個々の語にはそれが名指す対象がある、とする「アウグスチヌスの言語観」（cf. PI §1ff.）の一つの現れである。

を持たず、規則とは言えない。「K」に意味を与えるはずだった規則が規則の役割を果たさないと分った以上、その限りで「K」には意味が与えられていなかったことになる。「K」は特定の感覚には結び付けられていなかったのだ。

私的直示的定義に基づき私的感覚を指示する私的言語の想定が行き詰まることは、こうやって示される。これはまた、このような私的言語を要請する人間の描像　心は私的領域だとする描像　に欠陥がある、ということにほかならない。

振舞いの強調

人間の心は本人だけがアクセスできる私的空間だ、という描像は、表現形式のアナロジーへの固執から生まれるのだった。そして感覚日記の議論に代表される私的言語論を通して、そのような描像は困難に直面することが分った。デカルト主義的人間像の代わりにヴィトゲンシュタインが強調するのは、公的な生活世界という舞台において、心が身体に統合された人間像だ：「生けるものの振舞いを見ることは、その心を見ることだ (PI §357)」；「人間の身体が、人間の心の最良の描像だ (PI p.178)」これらのキャッチフレーズが我々に想起させるのは、次のような事実である。つまり実生活の多くの場面で我々は、人の様子を見ることで、その人の気持ちを理解する。家族だったペットが死んで涙にくれる子は、悲しい。指先の傷を押さえて顔をしかめる人は、痛い。赤ん坊に微笑む母親は、嬉しい。これらの状況に面しながら、心は私的領域だから人の心は本当は分からない、と考えることは、むしろ心に関する判断の基本的分別を欠いていることになるはずだ。

心的概念の意味を考える一つの方法は、人がそれをどう学ぶかを思い起こすことだ。ヴィトゲンシュタインは「痛み」という感覚語を例に、次のような可能性を指摘する：「語は、感覚の原初的で自然な表出と結び付けられ、その表出の場所に置かれる。子供が怪我をして泣き叫ぶ；大人たちはその子に話しかけ、彼に問投詞、次に文を仕込む。大人たちはその子に新しい痛みの振舞いを教えるのである (PI §244)」痛みには、怪我をするといった特徴的状況下での、泣く、顔をしかめる、などの特徴的表出がある。我々はそのような本能的表出によって、他者に痛みがあると判断する。そして子供に「痛い」を教えられるのも、そういった表出があるからだ。大人は、子供の痛みの本能的表出に「痛い」という言語表現を重ね合わせる。子供は泣きながら、「痛い」と言うようになる。子供はやがて、痛くても泣かずに「痛い」と言えるようになる。言語的表出が本能的表出に取って代わるのだ。子供がいったん「痛み」の使用を習得すれば、彼に言語的表出だけしかない場合でも、大人は今やそれを基準に子供に痛みがあることを判断できるようになる。

「痛み」という語を例に、その習得パターンを見たが、心的用語のこのような理解は、デカルト主義的理解とどこが違うのか。デカルト主義は表現形式の類似に惑わされ、「椅子」「私／彼には椅子がある」と「痛み」「私／彼には痛みがある」は、その用法も根本的に同じと考えるのだった。だがヴィトゲンシュタインは、見かけの類似の裏には、以下のような違いがあると考えている。

指示について：「痛み」は何よりもまず、「椅子」「テーブル」のように、直示的定義を用いて名前と対象を結合させる仕方　これを、名前と対象モデル、と呼ぼう　で説明できるものでない。「感覚日記の議論」(および「甲虫の議論」(PI §293))は、語は私的対象と規範的に結び付かないことを示した。ではどう考えるべきかという、一般に語の意味を知りたいときは(「意味は使用(PI §43)」なのだから)、その語が公共の言語実践の中でどう使われているかを調べればよい。「痛み」の使用を教える場面の観察からも、「痛み」の意味が汲み取れる。そしてそこで登場するのは先に見た通り、状況や振舞いであり、直示的定義により名前が与えられる対象物ではなかった。

三人称帰属について：「痛み」に　名前と対象モデルが当てはまらないとすれば、痛みを他者に帰属させる文(「彼は痛い/痛みがある/痛みを持っている」)は、その人物と私的対象の間の所有関係を描写するものでない。ヴィトゲンシュタインの考えでは、それらは、「生活という織物に・・・繰り返し現れる、[振舞いや状況の]パターンを描写する(PI p.174)。」というのも我々は、人が怪我をしてしかめ面をするのを観察して、「彼は痛い」と言うからだ。そして、しかめ面や呻きなどの特徴的な振舞いや状況は、「彼は痛い」と言うことの客観的根拠でもある。

一人称帰属について：第一に、三人称の場合と同様、痛みを自分に帰属させる文(「私は痛い/痛みがある/痛みを持っている」)は、自分と私的対象の間の所有関係を描写するものでない。しかし第二に、それは三人称帰属文と違い、振舞いのパターンを描写するものでもない。私は自分のしかめ面を観察して、「私は痛い」と言うのでないからだ。ヴィトゲンシュタインによれば、「私は痛い」は、呻きやしかめ面などの痛みの原初的表出とのアナロジーで捉えられるべきだ(PI §244)。呻きが痛みの原初的表出であるのに対し、「私は痛い」は、学習された痛みの表出である。「私は痛い」は呻き同様、いまや自ずと発せられる痛みの振舞いそのもので、それ自身は客観的根拠があって為されるものでない(PR pp.89-90)。逆に「私は痛い」こそが、他者が私について「彼は痛い」と言うための、客観的根拠となるのだ(cf. PI §377)。

以上のような違いの指摘が、表現形式の類似性による概念の混同を避けるためにヴィトゲンシュタインが与えようとする、心的概念の文法の見取り図的「展望」の例である。そこでは痛みの概念は、公的な状況や振舞いによって説明された。その説明では、痛みの擬物化も、内-外のアナロジーも登場しなかった。それゆえそれらに誘導されてデカルト主義的発想が生まれる余地もなくなるわけである。これによってデカルト主義的伝統を受け継ぐ経験主義的思考も打撃を被ることになった。ここまでで明らかのように、後期ヴィトゲンシュタイン哲学では、振舞いへの顕著な着目がある。人間の原初的振舞いは、痛み概念や、他の多くの心的概念の習得の下地になるだけでない。赤ん坊に対する言語全般の訓練可能性(cf. Z §419)、規則順守の岩盤(PI §206)も含め、言語全体が、人間が持って生まれる振舞いを基盤にしている。「我々の言語ゲームは、原初

的振舞いの拡張である（Z §545 ）。」「言語ゲームの根源および原初的形態は、反応である；ここからのみ、より複雑な形態が成長する。言語は洗練化である、と私は言いたい。“はじめに行為ありき”である（CV p.36 ）。」

行動主義の違いとさらなる疑問

振舞いの強調と行動主義との関係について述べておきたい。「行動主義」というラベルは、心という領域の独自性を認めない、この領域における本人の判断の特権性を認めない、などという非難の意味を込めて使われることが今では多い。行動主義の考えは基本的には、人間の心理は人間の行動で捉えうるというもので、例えば「人間心理の主題は、人間の振舞いだ」というワトソンの主張や、「心理学のすべての文は、…人間や他の動物の物理的振舞いを描写する」というカルナップの主張が、その方向を示している。行動主義の中身は、実際は多様である。あるものは科学的な方法論の主張で、あるものは哲学的な概念的主張である。あるものは心を否定し、あるものは否定というより心を物理現象に還元する。あるものは振舞いということで、ミクロの生理学的現象も含み、あるものは肉眼で観察可能な振舞いだけを考える。「行動主義」はこのように、行動を切り口に心へアプローチする諸々の立場の包括的名称である。振舞いを強調するヴィトゲンシュタインの心的概念の理解も当然、行動主義という大きな分類のどこかに位置付けられるのでないか、という疑いを招いた（cf. PI §307 ）。これについては差し当たり、ヴィトゲンシュタインと既成の行動主義には次のような違いがあることを指摘できる。

一人称 / 三人称の非対称性：行動主義者は一般に、一人称的心理言明と三人称的心理言明の文法的相違に無頓着だ。例えば「論理的行動主義」は、心理言明は行動の記述文に還元できる、と考える。この立場では、「彼は悲しい」といった文の真偽を確かめるには、我々は「彼はうな垂れている、涙している」といった文の真偽を確かめればよいことになる。そしてこれは彼の振舞いを観察することで為される。しかしこの立場では、「私は悲しい」の真偽も、「私はうな垂れている、涙している」といった文の真偽を（鏡などを使って）確かめることで、確かめられる性質のものであることになる。これは奇妙な事態であり、この立場の難点である。ヴィトゲンシュタインの場合（痛みの例を思い出そう）、一人称的心理言明は 三人称的心理言明と異なり 振舞いの記述文でなく、振舞いに準じる表出文だとすることで、難点を回避できている（cf. Z §472 ）。

偽装の可能性：上で述べたような行動主義の一派は、「彼は痛い」＝「彼は（一定状況下で）泣く、呻くなどの振舞いを呈している」という還元を行う。しかし痛みの振舞いが観察されるときでも、当人には痛みがないことがある。痛みの振り（Vorstellung）というものがあからだ。ヴィトゲンシュタインは、振りの可能性を積極的に認める。そのため彼は通常の行動主義者とは異なり、痛みの偽装をどう考えるかという（三人称帰属の構造的（konstitutionell）不確定性に絡む）微妙な問題を 振舞いのパターンの観点から（PI pp.228-9）で

はあれ 引き受ける (LW2 *passim*)

言語ゲームの還元不可能性：心理言明の行動言明への行動主義的還元は、実は案外難しい。我々は、人の悲しさや嬉しさの表情を、顔の部位同士の位置関係の変化の記述で表せまい。逆に顔の部位同士の動きの記述から、それが悲しみの表情を表しているのかどうかも分からないだろう (RPP1 §§919-920)。心理描写と身体描写は、同じ場面を前に発せられたものでも、一方が他方に還元できるものではない。二つの描写の密接な関連を強調しつつもヴィトゲンシュタインは、それぞれは独自の概念的空間を成す別個の言語ゲームだ、と考える。

人間のデカルト主義的描像を生み出すアナロジーに依存せずに、いかに心的概念が描写できるか (またその描写がどの点で従来の行動主義と違うか) を見た。これらの試みによってヴィトゲンシュタインは、問題を生むアナロジーがどれほど使われずに済むかを示せたと言えよう。しかし彼は、それらのアナロジーが実際どう使われているかを示したろうか。

ヴィトゲンシュタインは、アナロジーへ固執することの危険を懸念しているのであって、アナロジーそのものに反対しているのではない：「魂ということで、我々の頭の中にあるモノ、物体を思い浮かべるかぎりでは、[これは]危険ではない。…危険が始まるのは、我々が…それを昇華しようとするときだ (Ph §93)」「心に浮かぶ (in one's mind, before one's mind) 考えを表そうとする、と言うことは、…比喩を使うことだ。哲学をしているとき我々を誤らせないなら、これに問題はない (BIB p.41)。」ヴィトゲンシュタインによれば、「哲学は言語の実際の使用に、決して干渉すべきでない。それゆえそれは結局、言語を描写できるのみである (PI §124)。」彼は言う：「露にする、即ち内と外、という隠喩が、実際いかに使われているかを明らかにせねばならない (LPE p.223)。」したがって彼の哲学において、次のように問うことは意味があるのである：ではそういったアナロジーは、実際どう使われているのか。またヴィトゲンシュタインはこうも言う：「展望のきく描写は、まさに“つながりを見る”ことで成り立つ理解を与える (PI §122)。」これについては、次のように問える：では「身体の中」と「心の中」の「中」には、見るべき概念的つながりは何かあるのだろうか。

これらの疑問に対する答えのヒントは、『探究』第二部 およびその時期の考察に見出せると私は思う。そこで次に、第二部に視点を移すことにしよう。

『哲学探究』第二部 体験概念と言語の拡張

『探究』第二部についてのコメント

第二部期の考察の内容に関わる前に、文献的および伝記的解説を挿入しておきたい。『探究』第一部と同様、第二部も覚書の「アルバム」だが、その体裁は第一部とはやや異なる。それは i から xiv (ローマ数字の割り振りは編者による) までの一四の章に分かれ、それぞれの章は番号無しの覚書の羅列になっている。その中でアスペクト知覚に関する考察を含む xi が突出して長く、第二部

全体の六割を占める。

『探究』第二部の成立過程は、第一部と比べて単純である。第二部は、一九四六年から四九年の三年間に書かれた草稿をベースにしている。この時期のヴィトゲンシュタインの生活上の変化は、職務から解放され執筆に専念するため、大学を去る決意をしたことだ。一九四七年末に教授ポストを辞し、彼はアイルランドで著述を続けた。一九四八年までに彼は、MS S-130-135を基にタイプ原稿二二九（死後『心理学の哲学』として刊行）を、またMS-135の最終部分からMS-137の途中までを基にタイプ原稿二三二（死後『心理学の哲学』として刊行）を作成している。彼はまた、一九四六年以降の覚書を精選し、新たに手書原稿一四四を作っている。そしてこれを基に、一九四九年中頃に『探究』第二部となるタイプ原稿二三四を作った。これが、ヴィトゲンシュタインが作成した最後のタイプ原稿となった。

TS二三四作成後、ヴィトゲンシュタインはそれを携え、アメリカのマルコムを訪れたが、帰国後、かねてからの体調不良の原因が前立腺癌にあることが判明。彼は死ぬ直前までさらに一年半ほど手書原稿を書き続け、一九五一年四月、親しい人々に囲まれて六二年の生涯を閉じた。彼はケンブリッジのある墓地で、ムアヤラムジーのすぐ傍に眠っている。（晩年の遺稿からは『心理学の哲学に関する最終草稿』、『確実性について』『色彩について』が作られている。）

『探究』を第一部のみで出版せず、第二部を付けたのは、編者アンスコムとリースの判断である。この判断は論議を呼んだ。アンスコム達は、『探究』冒頭に添えられた「編者のことば」でこう述べている：「もしヴィトゲンシュタインが著作を自分で出版したなら、彼は第一部の後半三〇頁ほどの大部分を省き、その場所に第二部の内容およびさらなる考察を組み入れたらう。」この推察の根拠は、編者とヴィトゲンシュタインが一九四八年　その時点では第二部は、まだ手書原稿としても存在していなかった　に交わした会話らしい。第一部に組込む予定だったのが第二部の内容だった、とする根拠として、この会話が十分かどうかは心許ない。現在では、第一部と第二部は原稿としては別個のものだ、ということで、専門家の意見は落ち着いている。それゆえハッカーによる『哲学探究』の大部のコメンタリーも第一部しか扱っていない。当初からの遺稿管理人の一人であるフォン・ウリクトも　二つの原稿の統合の可能性は否定しないまでも　第一部はそれ自体で完結した著作で、第二部期の思考は「幾つかの点で新しい方向への出発を表している」という意見を表明している。

多様な体験概念と言語的表出

『哲学探究』第一部と第二部が別個の原稿だということは、両者に接点がないということではまったくない。第一部と第二部は、共に心的概念の探究が大きな課題である点で、連続性が明らかにある。だが、第一部と第二部が接点を持ちつつ、後者が　ウリクトが言うように　「幾つかの点で新しい方向への出発」なら、それはどんな点においてそうなのか。

第二部の時期には、心的概念の中でも特に、アスペクト体験や意味体験とい

った様々な体験概念に関心が注がれている。これらに対する関心が、一つの大きな点で、新しい方向への出発を表すと言える。したがって本章の残りの部分は、この観点の紹介に充てたい。まず第二部期に考察にのぼる体験概念を、幾つか例示しよう。アスペクト体験：ヴィトゲンシュタインは多くの例を挙げているが、これは例えば、ヤストローの図で知られる一つのイラストを見つつ、ある時点ではそこにウサギを「見」、別の時点ではアヒルを「見る」、という体験である（PI p.194）。（アスペクト体験には、聴覚的なものもある（Z §208））

意味体験：これは、馴染みの語を見聞きしたとき、その「意味」を感じる体験だ（PI p.215）。例えば「憂鬱」という字に憂鬱さを感じるなど、誰もが身に覚えがあろう。また馴染みの語を繰り返し唱えたとき、それがだんだん意味を失うように感じる、負の意味体験もある（PI p.214）。（「くも」と発音し、それがあある時点では雲として、別の時点では蜘蛛として「意味」できる能力の根底にも意味体験がある。）非現実感の体験：これは、眼前の光景が細部まで明瞭に見えているにも拘わらず、すべてに「現実」味が感じられない体験で、例えば離人症などで報告されるものである（RPP1 §125）。母音の色体験：ランボーの詩が有名だが、これは母音「a, e, i, o, u」に「色」を感じる体験だ（PI p.216）。曜日の太さ体験：これは、例えば水曜日は「太って」いて、火曜日は「痩せて」いる、などと感じる 心理テストの材料にでもなりそうな体験である（PI p.216, BrB p.137）

これらの体験が興味深いと思われる理由は、これらすべてで語の使用が通常とは異なるからで、それゆえ何故そんな使い方をするのかを問うるからだ。例えばアスペクト体験では、私はずっと同じものを見ているのに、違うものが「見える」と言う。なぜそのような「見る」の使い方をするのか、それは誤用でないか（RPP2 §370）。また、語の意味はその使用であり、それを見聞きしたときに得られる体験でないのに（PI p.181）。なぜ語の「意味」を体験すると言うのか（PI p.215）。「(非)現実」というのは本来、感覚語でないのに、なぜ或る感覚を表すのにその語を使うのか（RPP1 §125）。こういった疑問は、『茶色本』ですでに顔を出している。そこでは「(より)明るい」「(より)暗い」の意味を教えられた生徒が 本の表紙や動物の毛皮など いろいろな視覚対象について、それが明るいか暗いかを判断していく。作業は順調に進むが、彼は突然、母音にも「明るい」「暗い」を使い始める（「a は明るい」）。視覚的表現なのに、なぜ彼はこれらの語を聴覚刺激にも使ったのか（BrB p.138, p.148）⁶。

「なぜそんな使い方をするのか」という問いへの答えは、「明るい」「見る」「意味」…などの語の使用は 「足す二」などの算術用語と異なり 規則によって閉じられていないから、だろう。ヴィトゲンシュタインは我々の言語について、こう述べる：「…一般に我々は、厳格な規則に従って言葉を使い
はしない（BIB p.25）」；「…言語ゲームはいわば予測不可能なものだ。…それはともかく存在する 我々がともかく生きているように（OC §559）」上のような様々な体験で、言葉は通常とは異なる使用をされる。それは、我々の言

⁶ 言葉のこういった使用に感受性を欠く人も容易に想像できる。それらの人は、「アスペクト盲」「意味盲」などとして捉えられている。

語が至るところで規則に支配されているのでないからであり、言語が予測不可能な展開をしようからだ。

ヴィトゲンシュタインは『探究』第一部で、規則順守についての詳細な考察を行っている。しかし 規則に従って言葉を使うことがどういうことかと、規則に必ずしも支配されない我々の言葉を話すことがどういうことかは、混同されるべきでない。両者は違う。だからからこそヴィトゲンシュタインは、規則概念に関心を持ちつつ、規則からは予測不可能な言語の使用も、我々の言語使用の現実として受け入れる。しかし の観点は、『探究』第一部では概ね隠れたままだった。それは第二部でようやく全面に現れてくる。この意味で第二部は新しい方向への出発を表している。

ヴィトゲンシュタインにとって、言語の根底には人間の自然な反応があった。この考えは、ここでも有用である。考察中の諸体験で語が特有の仕方で行われるのは、それが自然だからだ。それは「テクニクの習得を基礎」に生じる我々の自然な反応である。負傷した人から呻きが漏れるのが自然の強制であるのと同じように、それは言語を習得した人から自然に押し出される体験の表出である。つまり、「痛みの原初的表出が痛みに属しているのと同じように、これらの表現は我々の体験に属している (cf. RPP2 §574)」のだ。

それゆえヴィトゲンシュタインは、アスペクト体験についてこう言う：「[“見る” という] 語について私が学んだことが、ここでこの語を使うことを私に強要する (RPP2 §370)。」意味体験については：「[“意味” という語] は、[意味は使用であることを知っている] 私に強制されたのである (PI p.215)。」非現実感の体験については：「私は [“非現実” という語] を特定の意味で使うことを学び、そしてこの語を、私は今やこのように、自然に (spontan) 使うのだ (RPP1 §125)。」ヴィトゲンシュタインは講義の中で、「I feel a presence」で表される体験について述べている：「これは自然な成長 (spontaneous growth) ...だ。人は “feel” を学び、“presence” を学ぶ。そしてある日、これらをつなげる。詩人がこういったことをする。ある人がそのような表現を使う。すると他の人々もそれを使うようになる (LPP p.270)」と。

言語的表出と人間の描像

我々の心的概念には様々なアナロジーが組込まれているのだった。例えば我々の心についての語りには「内-外」の図式が組込まれている。『探究』第一部には次のような覚書がある：「“私は心の内でそう決めた。”人はこう言いつつ、胸を示しさえする。我々はこのような語り方を、心理的に真剣に受け止めねばならない (PI §589、強調追加)。」もちろん「内」が意味するものは、身体を切り開いても見つからない。なのに何故、「内」という語をここで使うのか。また、ヴィトゲンシュタインは振舞いによって心的概念を説明しようとするが、その際「表出 (Ausdruck (< aus 外へ + drücken 押す) Äußerung (< äußern 外))」という言葉を使う。この言葉にも内-外の図式が隠れている。振舞いを強調した心的概念の説明は、内-外のアナロジーへの固執を排除するためのものだった。その説明でなぜ、排除しようとしているアナロジーが紛れ込むのか。また我々は痛みを表すのに、「鋭い」「鈍い」「重い」といった語を使う。だが痛みには

切っ先も重さもないのに、なぜそれらの語を使うのか。また我々は、「痛みは何ものでもない」と言われれば、「いや、それは鋭く感じたり重く感じたりする“何か”だ」と言いたくなる。だが痛みは物ではないのに、なぜ物を暗示するようなことを言うのか。これらの語り方を「真剣に受け止める」にはどうすればよいのか。

この疑問に対する最も適切な答えはここでも、「痛みの原初的表出が痛みに属しているのと同じように、これらの表現は我々の体験に属している (cf. RPP2 §574)」、だと思ふ。我々は時に、心を内-外のアナロジーで捉えつつ心について語り、痛みを擬物化しつつ痛みについて語る。それらの表現が、体験の表出なのだ、と私は思う。言語習得者である我々に対し、我々の自然がこれらの表現を強制する。そしてそのような強制が自然だと感じる事が、我々の言語を習得する条件でもあり、結果でもある。こう捉えることで、心的概念に組込まれたアナロジーが実際どう使われているか、を描写する視点が得られる。そしてヴィトゲンシュタインが次のように言うとき、彼自身が、心的概念に組込まれたアナロジーに対する、この新たな視点の可能性を示唆している：「君は“内-外”の描像を、人がピアノの音階について“暗い”や“明るい”を使うのと同じ仕方を使って使っているのだ (LSD p.348)。」

この視点は、人間の、デカルト主義的描像への退行を意味しない。というのも第一に、言語の根底には人間の自然な振舞いがある、というヴィトゲンシュタイン的視線は揺るがないからだ。彼の考えでは、心的概念の根底にも振舞いがある。「内なる心」という言語的表出でさえ、自然な振舞いの延長にあると捉えられるのである。「言語ゲームの根源および原初的形態は、反応である；ここからのみ、より複雑な形態が成長する。言語は洗練化である・・・(CV p.36)。」第二に　そして補足的に　「内なる心」という表出は、「人間の振舞いが人間の心の最良の描像だ (cf. PI p.178g)」というヴィトゲンシュタインの強調と、矛盾しない。矛盾があると考えるべきでなく、「内なる心」という表出は、それ自体が振舞いであると同時に、人間の描像をより多面的に・複雑にする、と考えるべきだ。それによって「心」や「人間」の概念は、「多くの枝分かれを持った概念 (cf. RPP2 §220)」になるのである。

本章第 部末尾で、二つの問いを提起した。一つは「“身体の中”と“心の中”の“中”には、何か概念的つながりはあるのか」だった。これに対しては「ある」と答えられる。両者にあるのは、ある概念の習得を基礎に生じるその概念の自然な成長、という関係だ。もう一つの問いは、「ヴィトゲンシュタインは、心的概念にある“内-外”といったアナロジーが実際どう使われているかを示したか」である。これに対しては、「意味体験やアスペクト体験における語の使用を取り上げることで彼は、“内-外”のアナロジーにおける語の使用を描写する視点を与えた」と答えられる。

我々は後期主著『哲学探究』の要を捉えることを目的に、彼の言語哲学と心理学の哲学が交差する点を中心に、ヴィトゲンシュタインの後期思想とその可能性を見てきた。ヴィトゲンシュタインは、「内-外」のアナロジーを昇華して出来上がるデカルト主義的な人間の描像を批判し、心的概念における行動の要素を強調したのだった。この強調は、行動主義の疑いを招いた。しかし『探究』

第二部期まで視野を広げると、彼の方向は「内なる心」という概念も受け入れるものであることが分かる。行動の強調が「内なる心」をも許容するなら、ヴィトゲンシュタイン哲学から汲み取れる人間の描像は、デカルト主義からだけでなく、行動主義からも真にかけはなれたもの、それらが各々の仕方で歪める人間の描像を日常のそれへと回帰させるもの、となるはずだ。

(飯田隆編『哲学の歴史』第11巻、中央公論新社、2007年出版予定)

引用・言及したウィトゲンシュタインの著作等の略号

- BIB “The Blue Book”, in *The Blue and Brown Books*, Blackwell, 1969.
- BrB “The Brown Book”, in *The Blue and Brown Books*, Blackwell, 1969.
- CV *Culture and Value (Vermischte Bemerkungen)*, Blackwell, 1998.
- LEM *Wittgenstein’s Lectures on the Foundations of Mathematics, Cambridge 1939*, Harvester Press, 1976.
- LPE “Notes for Lectures on ‘Private Experience’ and ‘Sense Data’”, in PO.
- LPP *Wittgenstein’s Lectures on Philosophical Psychology 1946-47*, Harvester Press, 1988.
- LSD “The Language of Sense Data and Private Experience”, in PO.
- LW2 *Last Writings on the Philosophy of Psychology (Letzte Schriften über die Philosophie der Psychologie)*, vol. 2, Blackwell, 1992.
- OC *On Certainty (Über Gewißheit)*, Blackwell, 1969.
- PI *Philosophical Investigations (Philosophische Untersuchungen)*, Blackwell, 1958.
- PO *Philosophical Occasions 1912-1951*, Hackett, 1993.
- PR *Philosophical Remarks*, Blackwell, 1975.
- Ph “Philosophie” (“Big Typescript” §§86-93), in PO.
- RPP1 *Remarks on the Philosophy of Psychology (Bemerkungen über die Philosophie der Psychologie)*, vol. 1, Blackwell, 1980.
- RPP2 *Remarks on the Philosophy of Psychology*, vol. 2, Blackwell, 1980.
- TLP *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge, 1961.
- Z *Zettel*, Blackwell, 1967.